

「いかなる犯罪であれ、およそ人の犯す罪について、一人の証人によって立証されることはない。二人ないし三人の証人の証言によって、その事は立証されねばならない(申命 19:15)」。

犯罪であれ救いの徴であれ、単独の立証では効力がないらしい。正直に語っていたとしても、人間の証しには偏りがあり、「二人ないし三人」が証言してこそ「真実」に近い像が描き出されるのだろう。

降誕の夜、イエスを見出した占星術学者や羊飼いは「二人ないし三人」、またはそれ以上であった。降誕から四十日後(ルカ 2:22,ピ 12:2~4)、家族は初子の奉獻(民数 18:15)のために神殿へ詣でた(ルカ 2:22)。神殿においてイエスを「メシア=救い主」だと証言したのも二人であった。

一人は老人シメオン(2:25)、もう一人は老女アンナ(2:36)。彼らは神殿に起居していても、祭司や神殿職員のような公職ではない。メシアを切実に待ち望む、いわゆる「講」のような信仰集団(2:38)の一員であつたらしい。

以前、青春 18 きっぷで延々と汽車に揺られ、下北半島の終点でバスに乗り換えて恐山へ行った。硫黄吹き出す草木無き荒れ地、あちこちに風ぐるま、おびたしい松葉杖や義手義足などの奉納物、おどろおどろしさに胸ときめく。

曹洞宗の寺がありお坊さんに尋ねると、イタコは仏教とは無関係だ、と蔑視した口調。整った禅寺とは対照的に、周囲は混沌とした土俗的な世界。雨まじりの寒い日でひと気がなく、粗末な小屋掛けの温泉にも浸かって、最終バスまで日本の原像をたっぷり味わった。

女預言者アンナは、恐山のイタコのような霊媒体質なのかもしれない。シメオンもまた、祭司や律法学者のような権威とは無縁な、民間の、庶民の預言者であつたらう。

考えてみれば、イエスの道備えをした洗礼者ヨハネだって世の権威とはまるで関係なく、降った「神の言葉」だけが彼をつき動かす根拠であつた(3:2)。シメオンにも「聖霊がとどまっていた(2:25)」。

救い主は、既存のいかなる権威によっても保証されえない。聖霊によって(2:25)、神の言葉によってのみ(3:2)、認められる方である。

シメオンは母マリアに言った。「この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められている。——あなた自身も剣で心を刺し貫かれる(2:34~35)」。

幼子の神殿奉獻は、まさしく十字架という犠牲。

これまで一年間、不可思議なことを「すべて心に納めて(2:19)」来たマリアではあるが、なんという残酷な預言であろうか。

現実には残酷だが、父ヨセフと母マリアを「祝福(2:34)」しての預言であつた。「剣で心を刺し貫かれる」ことの何が祝福なのか。「多くの人々の心にある思いがあらわされるため(2:35)」。

民の心が、信仰の如何が明確にされる。そのためのキリストの犠牲に、十字架のもっとも近くでそれに与るゆえの祝福。母マリアがどんな苦しみと不安の内に置かれたとしても、キリストの恵みはさらに勝っている。

「私たちの心にある思いがあらわにされる(2:35)」ために、私たちが信仰に与るうえで、イエスの十字架にはマリアの苦しみが共にあつた。その他、数多の民の苦しみが共にある。

私たちの苦しみがそれに加えられるかもしれないが、キリストの恵みはいっそう勝って有り余り、祝福される(2:33)。



《おまけのひとつ》

マリアが尊いのは十字架の傍らにいたから 母として誰よりも十字架の近くにあり 苦しみに与ったから それは祝福であつた 恵みは死よりもさらに大きい たとえ納得できなかったとしても